



| | |
|------------------|---|
| Title | 育児困難の構造と類型 |
| Author(s) | 岩田, 美香 |
| Citation | 教育福祉研究, 5, 25-34 |
| Issue Date | 1999-02 |
| Doc URL | https://hdl.handle.net/2115/28328 |
| Type | departmental bulletin paper |
| File Information | 5_P25-34.pdf |



育児困難の構造と類型

はじめに

子どもが生まれるのを待ち望み育児を楽しみにしていたにもかかわらず、実際に子どもを目の前にして繰り返される育児からは、必ずしも喜びや楽しみだけではなく、育児や子どもに対してのネガティブな感情も生じてしまう。それらをいわゆる「母原病」といった単に母親の個人的資質に原因を求めるのではなく、母親を取り巻いている要因に注目しながら、母親の心理的な負荷の軽減をはかろうとした研究として、一連の「育児不安」研究がある⁽¹⁾。

最近でこそ、子育て不安、子育て困難、育児困難といった用語が意識的に用いられるようになってきている⁽²⁾ものの、母親たちが日常的に使う語彙のレベルでは、「育児不安」によって、育児期における母親のネガティブな感情が表されている。それは、「育児ノイローゼ」というほどに重い病的なニュアンスを含んだものではなく、日常の育児での苛立ちや自信喪失感を表したものである。

しかし、一方では、その「育児不安」が、児童虐待の予防のための鍵概念として捉えられ、児童虐待に対する育児支援策も「育児不安」の軽減と重なる形で進行しているように思われる。子育て全般において、わが子がどのように育つか、自分の子育てで大丈夫かといった先の見えない不安は自ずと存在するものであるのに、とりわけ「育児期」に限定して、その不安が注目されるのは、なぜであろうか。

そもそも「育児」とは、広辞苑に「幼児を育てること」とあるように、就学前の子どもを育てることを意味している。一方、「子育て」が「子どもを育てること」であるならば、「子」という言葉が何歳までを意味するのか、といった個々の母親の捉え方によって、その期間の範囲は異なってくる。実際に、母親たちが捉えている「育児」・「子育て」概念では、「育児」については「就学前まで」とい

う共通性がみられたが、「子育て」については、「就学前」から「成人」に至るまで幅広い解釈がみられた⁽³⁾。すなわち、母親たちの捉えるレベルにおいて、育児不安というのは、子育て全般の不安における一部分に注目した概念であるといえる。本稿では、一般的に母親が抱く育児の心配や悩みや不安感を育児不安として示し、その中でも特に親の心理・意識的側面に注目し、育児雑誌等で取り上げられることの多い「育児不安」とは、一線を画して用いることとする。

現代社会では、イジメ、不登校、受験競争など学校や教育に関する問題が数多く取り上げられている。そうした中であって、育児期以降の子どもを育てていくうえでの親の心配や不安感というのは、育児不安と同様か、それ以上に深刻なものであるに違いない。しかし、そうした小学生や中学生、あるいはそれ以降の子どもを育てている母親の不安感を、「育児不安」というような形で社会的に問題視されることは少ない。この時期の子育て問題は、子ども自身や教育者の立場からの苦悩として教育問題で取り上げられることが多く、親は、その「責任論」の中で、学校と地域との対立の中で述べられる場合が多い。

本論の目的は、「育児期」の母親の問題に焦点を合わせ、「育児不安」を含めた育児の困難さがどのような構造を成しているのかを、親やその家族のもつ資源から表していくことにある。また、この育児期というのが、先に触れたように子育て全般の中での「就学前」という限られた時期に位置していることを踏まえつつ考察を進めていく。すなわち、どのような生活を営んでいる母親が、どのような育児の困難さをもち、それをどのように感じているのかを整理し、それによって、社会問題化されている「育児不安」の相対的位置や社会的な性格を明らかにしていく。

以下、第1節では、育児をしている母親がおかれている共通の現状を概観し、本論の分析の枠組

みを示す。第2節では、そうした枠組みから、「育児不安」を含めた育児困難の構造と現象形態について整理する。つづく第3節では、育児困難のなかでも、とりわけ「育児不安」が社会的に問題視されることに注目して、「育児不安」の社会的な性格を考察する。

1 育児をめぐる母親の現状

1) 現代の育児構造と母親の存在

今日の育児を行っている母親たち全体をとりまく環境は、どのような状況にあるのだろうか。ここでは、現代家族の育児の特徴からみていきたい。近代以降の家族の特徴は、高度経済成長に伴う住居と職場の分離、核家族化、専業主婦の増加、少子化、地域社会の崩壊等々で説明され、それぞれが、「母親が家庭で孤独に育児をすることへの困難性」をもたらした背景要因として説明されている。そうした社会的な要因を踏まえたうえで、育児に関わる諸主体の相互の関係に焦点をおき、現代家族の育児構造の特徴を示したのが渡辺である⁽⁴⁾。彼は、家族の育児の様相が、社会の様々な諸主体との分担や共同のいかんによって規定されるという前提に立ち、育児構造の理念型を提示している。彼によれば、現代の家族は、核家族のシステム境界が鮮明となり、社会の育児機能が核家族に独占・集中されるという単純な育児構造にある。こうした構造のもとでは、親以外の育児の担い手は、親を介して間接的に子どもとの関係を結んでいる状態となり、家族外部の諸主体の育児作用は、親によるスクリーニング（ふるい分け）を経て、子どもに達することとなる。すなわち、親が家族外部の養育（育児）に関わる主体とどのような関係を取り結ぶのか・取り結べるのかが、子どもの育児構造を規定する。家族の外部にどのような育児主体が準備されているか、どのような育児資源・育児機会にアクセス、コントロールしうるかによって子どもの育児構造は規定されているのである。実際、親たちは、子どもの環境のため、胎児・乳幼児期から多様な選択をし、環境をコーディネートしている。それは、早期教育といった教育

的なものに限らず、幼稚園や保育所の選択から友達作り、おもちゃ、衣服、スポーツ、社会的体験などといった、子どもに関するあらゆるものに及んでおり、容易に「育児産業」と結びつきやすい性格をもって現れる⁽⁵⁾。もはや、現代の家族が育児機能を担うに足る資源を保持することは不可能であり、家族に期待される役割は、家族外部の育児資源をコーディネートすることであるといえる⁽⁶⁾。

では、家族をとりまく資源（や機会）としては、どのようなものが考えられるだろうか。主要要因としては、経済的基盤や住環境、ネットワーク、情報・知識等々が考えられる。これらはいずれも現代社会共通の問題を抱えている。すなわち経済的基盤についてみれば、今日、親が育児環境を整える際には、その機能を外部に外注する、サービスを購入する形でコーディネートされている。そして、消費社会について言われている弊害が、育児においても同様の影響を受けることとなる。また、住環境では、住宅の高層化や子どもを連れて行ける場の減少、地域社会の連携の弱まりなどによって、親、とりわけ母親一人が家の中で孤独な育児を行うこととなる。そこでは、共同で子どもを育てていくという基盤はできにくく、常に他の親の育児や他の子どもの発達との比較がなされ、そこに学歴・競争原理が前倒しする形で入り込んでくる。そうした孤独感や閉塞感を緩和するために、ネットワークや情報・知識は有効な資源となりうるが、これさえも、その関係性と質・量によって、時には、資源が親を悩ませる要因となってしまう。つまり、情報や知識は親の行動や判断のための重要な資源であるが、今日のように、その量が膨大であり、内容も氾濫している状態にあっては、それを整理・処理することも難しく、かえって混乱を招いてしまうこととなる。夫や親族やその他のネットワークについても同様であり、母親の心理的不安や肉体的疲労を軽減させ、時には物質的・経済的な側面からのサポートの供給源となる一方で、その介入が多すぎたり大きすぎたりする場合は、かえって母親の心理的安寧を軽減させ

てしまう可能性も保持している。

これら、親を取り巻く様々な資源のなかで、どのような育児環境が整えられるかは、親が、それらの資源をいかにコントロールし、その活用を図っていくかという親のコーディネート力（問題調整能力）にかかっている。しかし実際のところ、その育児の担い手は、母親ひとりに集中してしまっている。育児における新たな動きとして、「父親の育児参加」の必要性が言われ、父親の育児参加の奮闘振りが紙面等に報告されてきてはいるものの、子どもの年齢が乳幼児に限ってみれば、それらは少数派にすぎず、まだまだ育児は母親中心に成されていると言わざるを得ない⁽⁷⁾。そこには、いまだに母親たちに深く浸透している「三歳児神話」も後押しをしている⁽⁸⁾。

こうした視点から母親の行う育児を捉えてみれば、個々の育児の質（結果的な良し悪しの判断は別としても）というものが、母親（家族）の社会的条件（家族をとりまく資源の量や質）と、その資源を取捨選択する母親の問題調整能力とによって左右されることとなる。しかも先に述べたように、母親たちがおかれている共通基盤というのは、情報や知識が個人の処理能力を超えるほどに氾濫しているにも関わらず、社会的に孤立された、孤独な育児である。そこで孤独感というのは、自らの子も他の子も共同で育てていくといった基盤が成立しにくく、さらに、その基準が他児との比較のなかで、わが子が「みんなと同じように」それでいて「少しでも早く」といった価値判断に依っていることから生じる孤独感である。

これこそが、現代における育児を担う母親の困難性の共通基盤である。現代における育児というのは、それ自体が困難さを伴っており、しかもその役割の負担と責任感は母親に集中している。そして、その役割が強まれば強まるほど、母親の精神的負担は増加していくと予想される。しかし一方で、こうした役割は、現代社会が母親に対して要請しているものでもあるといえよう。

2) 母親の主体性と二つの資源

前節でみた育児の現代の特徴である困難性は、

個々の母親にとって、どのような形でその問題が表れてくるのだろうか。「育児不安」が高いという形で表れる母親もいるであろう。しかし、この「育児不安」の高低は、育児の困難さの大小と一致するとは限らない。「育児不安」を感じない・感じている余裕すらない母親たちにも、意識とは別の行動レベルでの育児の困難さが生じている場合が存在するからである⁽⁹⁾。しかも、その育児困難は、一様なものではなく、個人の状況に加えて社会的な育児構造（階層性）をもって表れる。

マスコミで取り上げられるような「高学歴」で「自由時間が増加」し、数少なくなった子どもとの「母子カプセル」の中での母親がもつ育児困難や「育児不安」と、生活困難層といわれる家族の母親がもつ育児困難や「育児不安」とは、一部分共通したものはあっても、同じものとはならない。これらは、いずれも育児における困難を抱えている母親、家族であり、それぞれの問題性は取り上げられているものの、これまで、常に分断されて説明されており、両者を組み入れた包括的な理論は提出されてこなかった。

こうした問題を考えていく際には、やはり社会階層的な視点が必要となる。それは「資源」という概念自体に内包されているように、母親（家族）は社会的・市場的に外部から規定され、乳幼児を育てている母親であっても、そこには一定の階層差が生じているからである。そうした外部からの制約のもと、母親たちは、能動的に資源をコーディネートし、育児環境を整えていくのである。

さらに、こうした視点は、社会的に弱い立場にある母親たちをとらえ直すという意味においても重要となる。一般に、社会的弱者と言われる家族は、社会的制約が大きいと、常に受動的な立場（援助を受けるだけの立場）にあると思われがちであり、彼女らに対するアプローチも固定的な実態把握が多い。しかし、彼女たちは、問題解決に向かって努力していないというわけではなく、努力してもできない状況におかれており、その結果として問題未解決という状況が残されているととらえた方が、実態に近い⁽¹⁰⁾。これはまた、近年、家

族の再組織化の過程としてとらえるという視点⁽¹¹⁾が提出されているように、家族の「能動的」な活動という立場に則して、私的に営まれている子育てが社会的に制約されている部分を明らかにすることにもなる。

ところで、社会階層的視点を導入するといっても、従来の社会階層区分に用いられるような収入や財産、学歴、職業による階層差をみていくだけでは、先に述べた母親の主体的な問題解決の能力差は問題とされなくなってしまう。すなわち、従来の社会階層的区分は、家族の外にあって母親が使える資源を規定しているものではあるが、その性質が固定的であるために、一定の階層内の個々の母親の能動的な育児（資源のやりくり）が描かれなくなってしまうのである。しかし実際には、母親たちはより流動的・操作的な資源を操って（コーディネートして）具体的な問題解決をはかっているのである。

そこで、社会階層差といったことを、より具体的な類型として把握するための手続きとして、Sandra Wallmanの用いる構造的資源（Structural Resources）と編成的資源（Organizing Resources）という資源システム⁽¹²⁾の概念を応用してみる。すなわち、所得・職業・学歴などの構造的（ハードな）資源に加え、時間や情報やネットワークといった生活のソフト面にあたる編成的資源を導入し、母親（家族）を類型化して捉えていく⁽¹³⁾。

これまでの研究は、母親の心理・意識的な側面、いわば上部（「育児不安」）から、その下部構造を説明しようとしていた。しかし、それでは心理的に「育児不安」を高く訴えている母親の背景要因を説明することはできても、「育児不安」を説明したことにはならない。また、「育児不安」が低ければ、育児の困難性がないものとして捉えられてしまう恐れがある。

「育児不安」が何であるかを説明するためには、その土台となっている、「育児における階層構造（編成資源の違いや、そのコーディネートの違いから生じる）」から説明していく必要がある。そうし

た育児の社会階層構造の全体像を一度明らかにしてはじめて、それらの上に位置している母親の意識がとらえられるのではないだろうか。また、それによって、母親の「育児不安」や、それを含む育児困難といったものの相対的な性質や相互の関連が説明できると思われる。

2 育児困難の類型的把握

1) 資源と育児困難の関連

本節では、先に概観した共通の育児困難が、生活の諸条件によって、どのように表れてくるのかを構造的資源と編成的資源から整理する。

ここで構造的資源と編成的資源とのありようによって類型化される育児困難の表れ方を提示してみる。図1は、縦軸に構造的資源の大小をとり、横軸に編成的資源の大小をとることで、家族を4つに類型化している。ここで操作的に、構造的資源も編成的資源も大きい家族が「A」、構造的資源は大きい編成的資源は小さい家族が「B」、構造的資源は小さい編成的資源が大きい家族が「C」、構造的資源も編成的資源も小さい家族が「D」とする。個々の母親たちは、家族がもつ資源に加えて、それらをいかに活用しているかによって各事象内にプロットされる。これらの家族の特徴を、これまでに実施した調査の結果⁽¹⁴⁾を参考にして概観していく。もちろん、構造的資源は編成的資源を一部分規定しつつも、その編成的資源

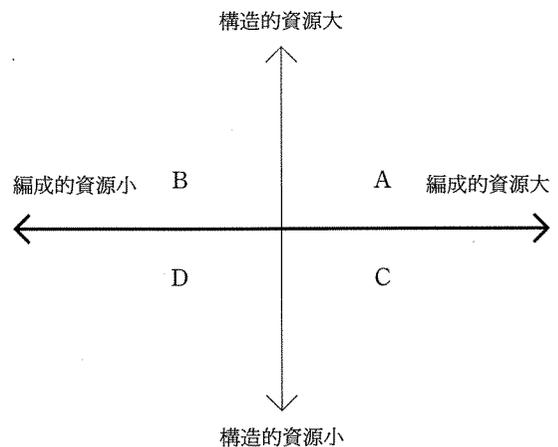


図1 家族のもつ資源と家族の分類

の内容によっては、この図のようにスマートに分類されるものでもない。しかしここでは、そうした資源の違いによる変動を考慮に入れながらも、その領域での典型的なケースを示していく。

これらの範疇に該当する家族とはどのような家族であろうか。Aに位置する家族は、家族の収入も高く子どもの物的な環境も「整備」さえている。また、母親をとりまくネットワークも広く、情報や知識も豊富に存在している。編成的資源を「時間」でとった場合には、時間に余裕のない共働きの母親は、B領域に位置することとなるが、反対に構造的資源の高さから、様々な育児支援やサービスを活用することで、時間を創り出し、このA領域に位置している母親もいる。

Bに位置する家族は、構造的な資源は保障されていても、母親が活用する時間や情報やネットワークが乏しく社会的に孤立しがちな存在となる。この家族の典型例は、転勤の多い家族があげられる。母親が築いてきたネットワークは、夫の転勤によって分断され、母親は新たな地域で、自らのネットワークを構築し、情報を入手していかなければならないこととなる。また、先に述べたようにフルタイムで、所得はあっても編成する資源を得にくい就労条件にある母親などもこの領域に位置することとなる。これらA領域とB領域のあいだは、編成的資源の内容や母親の動きによって、プロットが変わりうる。

Cに位置する家族は、構造的資源に制約はあるものの、母親の活用する編成的資源が比較的多い。ここでの例は、現代では少なくなったといわれているような昔の下町の家族や、育児サークル等での活動を主体的に行っている母親が考えられる。しかし、Cに位置して育児のネットワークが充実している母親でさえ、構造的資源に規定された生活問題が育児困難に反映しているケースが少なくない。また、編成的資源を「情報」や「ネットワーク」ではなく「時間」でみるならば、低賃金でありながら、フルタイムに近い時間のパートタイム就労を強いられている母親などは、D領域に位置することとなる。このC領域とD領域のあいだも、

A領域とB領域のあいだと同様に、編成的資源の取り方や母親の動きによって、プロットされる位置が変わりうる領域である。

さて、最後のD領域であるが、ここに位置する家族は、構造的資源も、それによって規定される時間・情報・ネットワークなども低く、母親は社会的に孤立しがちとなる。ここでの家族の例としては、生別母子家族や生活保護受給家族など、社会的に弱い立場にある家族が考えられる。そうした家族の中でも、育児サークルや自らのネットワークで活動を広げている母親は、C領域にプロットされ注目されることもありうるが、そうした主体的な動きができないでいる母親は、D領域に位置したままで、たとえ育児困難が存在しても「育児不安」研究においては、その射程に入らずにきた。

また、A領域からD領域を通し、全体的な傾向として言えることは、構造的資源の大小が生活問題の解決を規定していること、それにもかかわらず一般的な育児不安というのは、どのグループにも一様に存在しているということである。前者に関しては、AやBに位置する家族は、これまでに生活上の大きな問題は抱えてこなかったか、問題はあっても、資源の動員によって解決されてきている。一方、CやDに位置する家族は、育児上の問題も、その背景に就労の不安定さや借金等のような生活問題があったり、生活問題が解決されているように見えるケースでも、状況が一つ変われば、すぐさま生活と育児の困難さが入り交じって表れてくるというリスクを背負っているケースが見られた。しかし、そうした生活問題の有無や大小に関わらず、育児をしていくうえでの悩みは、A～D領域を通して抱えており、一定の高さ（健康的な範囲）での育児不安として存在していたのである。

その中から、Aに位置する母親の中には、一般的な育児不安が、社会的に問題視されるような「育児不安」へと増幅して感じている母親が存在していた。彼女たちには、子どもに特別の問題がなくとも母親の不安感が存在していること、また、自ら「育児不安」が高いと認識しており、その不安

を解消するために、子どもに良かれと思うことを賢明にコーディネートしているという特徴がみられた。しかし、実際のコーディネートは、現代の氾濫する情報の一つ一つに過敏に反応し、また、母親自身の生活よりも「子どものため」だけが、コーディネートの方向性を決定してきたことから、コーディネートが空回りしている状態にあるといえる。反対に、CやD領域の中には、育児上の問題や困難を抱えているにもかかわらず、生活問題が先立って「育児不安」として意識していない母親、あるいは、育児自体を放棄しているために、一般の育児不安としてさえも意識に上っていない母親たちが存在していた。これらのことは、図1においてA・B領域とC・D領域との境界が太い線で表されているように、構造的資源の大小によりA・B領域とC・D領域とで、問題の性質が大きく2つに分かれてしまうということを示している。

次に、構造的な資源の制約により問題の性格が異なることを踏まえたうえで、育児困難を構成する、心理・意識レベルの「育児不安」と、実際の行動レベルでの育児困難とが、先のA～D領域の家族について、どのように表れるのかを示してみたい。「育児不安」の高低と行動レベルでの育児・生活問題の有無とで4つの育児困難の表れ方を示せば、①「育児不安」も低く、実際の育児・生活問題も存在しない、②「育児不安」は高いが、実際の育児・生活問題は存在しない、③「育児不安」が高く、実際の育児・生活問題も存在する、④「育児不安」は低いが、実際の育児・生活問題が存在する、が考えられる。これらを先のA～D領域の家族に当てはめると、①や②にはAとBの家族が当てはまる。A領域の家族については、これまで育児不安が「育児不安」として強めてしまう要因があることのみに触れてきたが、それと同時に、資源の豊かさから生活が安定し、育児を楽しんでいる母親たちも存在しやすいのである。反対に、③や④は、C・D領域の家族にあてはまり、中でも④の表れ方(潜在化してしまうという表れ方)は、主に構造的・編成的資源の小さいD領域の家族に

みられる。

2) 「育児不安」と育児困難

ここでは、育児困難のなかでも、その意識レベルを捉えている「育児不安」が、育児困難全体との関連で、どのような位置を占めているのかを考えていく。

前項において、C・D領域からA・B領域への移動は、構造的資源に規定されて生じる生活問題によって容易ではないことが確認された。そこは、母親の自助(頑張り)を越えた領域である。すなわち、生活基盤(生活の安定から生活問題・生活不安をかかえている層まで)を通してみることで、そこを境にして、「育児不安」という形で目に見えやすい育児困難と、周囲からは見えにくい育児困難とに分けられる。

生活基盤の安定さを境として、問題や不安が顕在化しやすい「育児不安」が、生活基盤が安定している層から上に位置し、その下部に位置している潜在化した育児困難と一線を画している。先にも述べたが、一般的な(健康な範囲の)育児不安というのは、生活上の問題や不安がクリアされている・いないにかかわらず、子どもを育てている親であれば、誰しものが抱くものである。いわば、その原因は「親であること」・「育児をすること」にあり、その解決としては、友人をはじめとしたネットワークの中で解消され、あるいはまた、子どもの成長とともに自ずと解消されることとなる⁽¹⁵⁾。しかし、一般的な育児不安であっても、それに敏感に反応して不安を高めていく母親が、生活基盤の安定している階層に位置していることが多いのに対して、生活基盤が不安定で、生活問題を抱えている母親たちは、「育児不安」は言うまでもなく育児不安さえも生活問題につぶされて後回しとなったり、さらには、育児や責任の放棄という現象形態をとる。つまり、育児不安を顕在化し続けることができないほどに生活に余裕がなかったり、中には育児や子どものことを考えることさえも億劫となってしまう母親である。それらは、母親個人のパーソナリティ要因も関連しているとはいえ、母親をそこまで追いつめる現在の生活環

境や、それ以前の問題として、これまで、子ども・育児に対する喜びや親としての自覚を学ぶ機会に恵まれなかったという、母親の育ちの生活環境の不備も存在している。

健康的な育児不安であっても、他の子どもとの比較や氾濫する情報や育児関連サービスの中で強められてゆき、さらに母親が心理的あるいは物理的に孤立している中では、解消の手だてもないままにケアの必要となる「育児不安」、さらには育児ノイローゼへと強められる場合もある。生活基盤の安定性の上に位置している健康な範囲の育児不安というのは、その極にあるケアに必要な「育児不安」や、「育児不安」とは一線を画している虐待等を取捨する形で、マスコミなどにも注目されていく。その結果、健康的な育児不安が、カウンセリング等を必要とする「育児不安」として、母親自身にもよっても、また、マスコミや専門家によっても創られていく場合が少なくない。

一方、生活問題や生活不安を伴いつつ生じる育児不安や育児困難は、構造的資源の小さいグループに生じやすい。しかし、それらの問題は、実態としてはとらえにくく、ケアの必要な範囲を越えて、虐待や放任が事故・事件となるような形で表れてはじめて、その問題の深刻さを知ることとなる。いわば「放置されている育児困難」として存在するのである。

3 「育児不安」の社会的性格

前節でみてきたように、育児をしている母親が抱くネガティブな感情と一口に言っても、育児をしている母親であれば誰しもが抱く一般的な育児不安と、その中からさらに不安を増幅していく「育児不安」、また一方で、困難さがありながらも育児不安として意識していないという状態が確認できた。

ところで、一般的に誰しもが抱く育児不安が、「育児不安」として突出する形で表れ、それが問題視されるのはなぜであろうか。ここでは、一般的な育児不安が突出する形で表れる「育児不安」について、社会的な側面から性格規定を試みる。そ

こから「育児不安」が、とりわけ社会的に注目されることの根拠が見いだせると思われるからである。

誰しもが抱く一般的な育児不安が「育児不安」へと増幅していくには、どのような条件が重なっているのだろうか。母親が「社会的に孤立しがちで、母親だけに責任が集中しやすい」という現代の育児を担っていく時、氾濫している情報や知識の中では、「他の子どもや他の母親との比較」をしていくことでしか「育児の標準(スタンダード)」は見いだせない。しかし、その「標準」は母親の「期待」とも重なって、常に上昇傾向にある。その結果、他の母親や他児との比較には「これで十分」というゴールはなく、母親たちを慢性的に「育児不安」という意識状態へと追いやっていく。その「育児不安」にしても、大部分は「育児仲間や友人」との話し合いの中で緩和されるものであり、取り立てて「育児不安」として問題視しなくとも、子どもの成長とともにいつの間にか解消されてしまう育児不安との大差はない。しかし、時には悩みを共有できるような友人をもてなかったり、相談をしてもかえって混乱や比較を強めることとなり、再び、その回答を情報や商業的サービスに求めるという悪循環をもたらす。こうして「情報や育児・教育サービス」と「他児との比較」とを往復しながら、ますます「育児不安」を高める方向へと上昇していく螺旋階段のような構図が考えられる。母親のもつ資源とコーディネートに即してみれば、「育児不安」を解消しようとするために、多様なコーディネートができる情報や知識などの資源が豊富に存在していることが必要であり、コーディネートを決定づける方向性としては、「母親自身と子ども」の両方を向いているのではなく「子どもだけ」を向いているという特徴がある⁽¹⁶⁾。さらに、そうした情報・知識の収集や子どものためのコーディネートを実施できる時間と余裕が、母親の生活の中になければ、この「育児不安」への螺旋階段を登り続けることはできない。反対に、そうした余裕があるからこそ、母親の育児は創られた「標準」へ向かって上昇し続ける。

子どもが乳幼児である「育児」の段階では、その比較する内容も「他の子の方が早く歩いた」、「他の子の方がおむつが早く取れた」といった単純なものが多い。こうした差異は、多くの場合、成長に伴って、どの子もクリアしていく発達課題である。しかし、子どもの成長とともに「子育て」の段階に入っていくと、それらは成績という目に見える形で、「他児との比較」や「子育て不安」は強く表れてくる傾向にある。「育児不安」は、こうした子育て競争における不安が前倒し的に（年齢が幼い段階へと）覆い被さってきている現象であるとも考えられる。

子どもを育てていけば、わが子に対して、このように育ててほしいという期待や願望を抱くのは当然の感情である。しかし近年では、そうした期待が母親個人の期待というよりも、母親の外側から創り出されたものといった方が実状に近く、母親たちは否が応でも、他児との比較をしてしまう環境にある。この領域は、育児・教育産業のマーケットとして、かなり大きなシェアを占めており、実際にテレビや新聞・雑誌でのコマーシャル、さらに幼児のいる家庭へのダイレクトメールで送られてくる早期教育や育児サービスの案内は、母親をそうした教育やサービスへと駆り立てる内容であふれている。母親個人に則して言えば、「よその子に遅れをとらないように……」・「後で困らないように……」といった子どもを“想って”の行動であるにすぎない。しかし社会の側から、特に産業の側に立てば、これは、子どもが大事にされているのではなく、子どもが一種の「商品」としての意味をもちはじめたに過ぎない⁽¹⁷⁾。こうした育児産業の流行について、子どもの社会化との関連でみれば、今や商業的支援の内容は、早期教育に代表される「子どもの知能・才能」を伸ばすことに終始しておらず、母親のニーズに応えるという名目で（実際にはニーズを創り出してもいるが）、衣食住という育児や生活の基本的な領域にさえも「支援」が行き届いている。そして皮肉なことに、育児や生活を外部化すればするほど、家族の外部との接触が増えているにも関わらず、母親

が孤立化していくのである。これまで、塾通いに代表される学歴社会において、いわゆる「三次的社会化」の領域において商業的支援が家族の教育機能を代行してきていることは言われている⁽¹⁸⁾。しかしそれが、「二次的・一時的社会化」の領域においても、家族の機能が商業的支援に代行されてきており、それを後押ししているのが、「育児不安」の社会問題化ではないだろうか⁽¹⁹⁾。すなわち、今日の「育児不安」は、現代の育児の困難さを共通基盤としながらも、母親の心理的側面に注目することによって、問題の表面的な解決が育児サービスへと傾斜していく中で創られた産物であると考えられる。そして、そうした母親の心理と育児サービスとの間で、「育児不安」が増幅してゆく側面において「社会問題化」してきていると言えるのではないだろうか。

おわりに

少子化の要因として、「子育てにお金がかかるから」という理由が第一位を占めている。実際に育児をするうえでは、子どもの「もの」の購買力にしても、その子どもを育てる母親の「もの」や「時間」の捻出のためにしても、様々な状況において、家族のもつ構造的な資源に制約される部分は少なくない。しかもそれが、物質的な育児の側面に限らず、育児における母親の心理的な側面をとらえた「育児不安」というものでさえ、家族のもつ資源、すなわち生活構造によって規定されていることが示された。

また、そうした資源の大小の極に位置する問題に共通する概念が「孤立」である。これまでみてきたように、母親の存在も、資源のありように規定されながら二種類の孤立化が考えられる。一つは、情報やサービスを求めて育児を外注化していけばいくほど、母子のカプセルが社会から孤立していくというパラドックスのような孤立化であり、いま一つは、経済的要因や社会的偏見などにより、物理的に社会から遮断する（される）形での孤立化である。では、こうした二方向の孤立化（＝困難）に対して、どのような「支援」策が成さ

れてきたのであろうか。

育児支援に代表されるサービスは、主に、前節の図で示されたところのB領域→A領域の方向性を援助することに重きが置かれてきた。もちろん、夫のサポートや電話相談、育児サークルをはじめとした、顕在化された「育児不安」への様々な育児支援については、その重要性を否定するものではない。しかし、それらの対応さえも万能ではなく、「育児不安」の社会的性格からも示唆されたように、母親のネットワークづくりが解決とはならず、かえって他児との比較を通して「育児不安」を高める場合も少なくない。

そうであれば、一方で「競争圧力」を緩和させる努力の中で上述の支援を強化するとともに、他方では、「放置されてきた育児困難」を抱えている母親たちも視野に入れた保障を中心に考えていくことが必要となる。すなわち、二つの孤立化に対応していくことである。それらの極に位置する母親たちには、C・D領域→A・B領域の方向を援助するための生活基盤の充実とともに、相談業務にしても、「待ち」の姿勢の電話相談や育児サークルづくりの場の提供だけではなく、より積極的な介入が必要となる。こうした対応は、子どもの立場からみれば「子育ての保障」でもあり、社会的に弱い・潜在化している立場にある親や子どもを視野に入れて初めて、社会全体の子育て保障の基盤が考えられると思われる。

注と引用文献

- (1) 牧野カツコ「育児における〈不安〉について」『家庭生活研究所紀要』第2号、1981年。
 牧野カツコ「乳幼児をもつ母親の生活と〈育児不安〉」『家庭生活研究所紀要』第3号、1982年。
 牧野カツコ「働く母親と育児不安」『家庭生活研究所紀要』第4号、1983年。
 牧野カツコ・中西雪男「乳幼児を持つ母親の育児不安——父親の生活および意識との関連」『家庭生活研究所紀要』第6号、1985年。
 牧野カツコ「乳幼児をもつ母親の学習活動への参加と育児不安」『家庭生活研究所紀要』第9号、1987年。
- (2) 大日向雅美・佐藤達哉編『現代のエスプリ 342 子育て不安・子育て支援』至文堂。
- (3) 岩田美香「縦断調査からみた「育児不安」の性格」『北海道大学教育学部紀要』第74号、1997年。
- (4) 渡邊秀樹「現代の親子関係の社会学的分析——育児社会論序説」社会保障研究所編『現代家族と社会保障』、1994年。
- (5) 汐見稔幸『幼児教育産業と子育て』岩波書店、1996年。
- (6) 渡邊秀樹、前掲書、1994年、P.86。
- (7) 働く母親が増加し、M字型就労の底辺は上がってきているが、子どもの年齢が3歳未満で見ると73.3%が、3～5歳で見ても63.3%が、専業主婦による子育てをしている。『児童をとりまく世帯の状況』厚生統計協会、1995年。
- (8) 『臨時増刊アエラ 子どもがわからない』朝日新聞社、1998年、Pp.144～149。
- (9) 岩田美香「母親の資源と行動の分析」『教育福祉研究』第4号、北海道大学教育学部教育計画研究室、1998年。
- (10) 杉村宏・岩田美香『単親（父子・母子）家庭生活実態報告書』北海道民生委員児童委員連盟、1996年。
 岩田美香「ひとり親家族の生活と社会関係——全道と札幌市における生別による母親の検討から」『北海道社会福祉研究』第18号、1998年。
- (11) 藤崎宏子「母子寮世帯の家族解体——再組織過程——方法論的検討——」『家族研究年報 No.5』家族問題研究会、1979年。
 松浦勲「離別母子世帯の生活構造——家族解体と再組織化を通して」『高知大学教育学部研究報告』第一部第40号、1987年。
- (12・13) 「構造的資源 (Structural Resources)」と「編成的資源 (Organizing Resources)」とは、Sandra Wallmanによって提出された資源のシステム理論である。彼女は、社会的弱者も、よりよい資源を求めて自分たちのおかれた状況を改善する力をもつ

ているという前提に立ち、様々なカテゴリーに属する都市の市民が、どのような資源の選択を行い、また、制約を受けているのかを明らかにした。その際、従来の経済的資源モデルである土地（住宅）・労働（サービス）・資本（商品とお金）という構造的（ハード）な資源に加えて、時間・情報・アイデンティティの3つを生活のソフト面にあたる編成的資源として導入した。

なお筆者による研究では、編成的資源として時間・情報・ネットワークを用いた。母親と子どもが孤立している現状に注目した点からも、母親が社会の中で取り結ぶネットワークの量と質の把握は重要だと考えるからである。

Sandra Wallman (1984) *Eight London Household*. Tavistock Publications Ltd., London. (福井正子訳『家庭の三つの資源』河出書房、1996年。)

- (14) 岩田美香、「母親の資源と行動の分析」、前掲書 1998年。
- (15) 岩田美香「縦断調査からみた「育児不安」の性格」『北海道大学教育学部紀要』第74号、1997年。
- (16) 岩田美香、「母親の資源と行動の分析」、前掲書 1998年。

(17) 山下恒男『子どもという不安』現代書館、1993年。

(18) 育児産業の流行について、子どもの社会化との関連で説明しているのが汐見である。彼は子どもの社会化を、生まれたあとの家庭での養育による「一時的社会化」と家の近所での遊びや近隣の人間関係、さらに家の仕事などに加わることによる「二次的の社会化」、そして、学校に行つて制度化された教育を受けることによる「三次的の社会化」という3つに分類している（この3つの社会化は段階論ではなく、同じ時期に平行して関連をもちながら機能するとしている）。そして、この二次的の社会化の変化によって家庭養育機能の負担が増えたことが、商業的支援である育児産業を流行らせると述べている。汐見稔幸『幼児教育産業と子育て』岩波書店、1996年。

(19) 「不安」が産業の対象となることは、竹内が、「心身」の不安が強くなればなるほど、巨大な市場ができあがり、「不安産業」とでも呼ぶべき分野が組織され、不安の産業化が進展していくとしている。竹内真澄『現代の不安と救い』飯田哲也・浜岡政好『人間性の危機と再生』法律文化社、1988年。

(岩田美香・北海道医療大学講師)